

展 望

書かないという表現

大西 淳子

末永幸歩『13歳からのアート思考』を読み、短歌のことを考えた。

二十世紀初頭にカメラが登場したことにより、アートの存在意義は大きく揺らぎ、写真的に世界を描く必要がなくなったという。確かに、ルネサンス期の絵画は、写実的で美しく目で観賞できるが、現代アートとなると、具象物が描かれていないことも多く、心の目で鑑賞しなければならない。本書で特に興味深かったのは、長谷川等伯が描いた国宝《松林図屏風》だ。紙面で絵はお見せできないが、描かれているのは松が数本、しかもはっきり見えるのは三〜四本だけで、他は淡い。画面の約半分は空白だ。しかし、見える。心の目で見ると、その奥には、おびただしい数の松があり、人影はなく静かであるが、遠くで鳥の声を聞こえる。

短歌でも、書かないことで表現に奥行が出ることがある。

KAMIKAZEは何処より吹く花電車、
花ゆりかもめ軌道走る

藤原龍一郎『202X』

神風は、神が吹き起こすという強い風、花電車は、装飾（デコレーション）を施した電車。強い風がきて、どこから吹いてきたのだろうと見渡すと花電車があり、軌道走っていた、と解釈したが、日本人としては、第二次大戦末期の特別攻撃隊を思わずにはいられない。電車は当然軌道走っていないのだが、

軌道の先が急に心配になる。死を承知で飛行機ごと敵に突っ込んでいった攻撃隊の悲劇を思うと、いっそ軌道を外れ、銀河鉄道のように自由に空を走っていった方がいいかもしれない。花を二回繰り返し、美しい言葉で現在を詠んでいるが、軌道をゆくことの恐ろしさ等、平和について深く考えさせられる。

その筆致に躊躇い見えず 原稿の展示さるるは一枚目多し 永田淳『竜骨もて』
「池波正太郎記念館」と詞書のある一首。

展示されている作家の手書き原稿は、確かに一枚目が多い。タイトル、筆名、書き出しの部分に乱れは少ない。しかし、書き進めていくと、加筆、訂正、大幅な削除、入れ換え等必ずあるものだ。作者は、出版社の社主とし

て、多くの原稿を見てきた。一枚目はキレイだが、原稿全てがこうではないということを知っているのだ。筆致に躊躇いのない一枚目を詠むことで、二枚目以降の作家の筆使いや溜息、歓喜の場面が想像でき、イメージの膨らむ一首である。

これまでの二首は、読む人によって想像の幅は違うかもしれないが、書いていない部分も書こうとしたものは想像できた。しかし、次の一首には驚いた。

これもまた短歌なんです「
律儀な人にはなんにも見えぬ
」

岡田衣代『パールグレイの瞑想』
カギ括弧のなかは、五文字の空白である。

作者が意図して想起させようとしている言葉は見当たらない。完全にこの五文字は読者に任せるというスタンスだ。「律儀な人にはなんにも見えぬ」と言われれば、なんとかして空白を埋めようとするだろう。作者と読者で作り上げる一首と言ってもいい。三十一文字しかない短歌の五文字分を手放す潔さで、こんなに自由でよいのだと思わせてくれる。作者は一九四〇年生まれ。創作を重ね、なお新しい表現に挑戦している。

あなたは、この五文字の空白に、どんな言葉を入れるだろうか。